

小倉弘子著『律子の肖像』（静岡新聞社刊）を読んで

馬場駿

この小説は、口が重く、容姿に自信が無く、「小さいときから人のことばかり気にして」いる律子の、心の歴史を描いている。

文章は極めて平明で、一見少女の日記のようにも見えるが、読み進むうちに読者は、それが作者の熟練の技なのだと分ってくる。読み手の呼吸に優しい句読点の置き方。息苦しくないのだ。読み違いを招かない適切な文末。作者に凜（りん）とした姿勢があるからだ。主人公の心理を客観的事物の描写に映し解釈を委ねる手法。読者を信じているからだ。回想挿入の時機の妙。それは主人公の心の揺れにフィットしている。要するにこの作品は、小説を愛し文章を学ぼうとする者にとっての、最高の教科書といえる。

『律子の肖像』は、ただの自伝小説ではない。社会派小説でもある。律子が十歳から二十歳までの間に見聞きし思い悩むことは全て、当時の国家・社会が抱えていた病巣だ。人種差別、貧乏人・結核患者・ハンセン病患者・妾などに対する偏見、節操の無い国策、掌を返した国家教育、等々。特に、腹が減ったら大声で歌えと命じられ、そのとおりにして飢えをしのぐ疎開児童の描写は、一万語を費やした反戦演説に優る。これらを作者は、決して生（き）のまま提示することなく、律子の想いの中に溶解させている。しかも、律子の目を逸らすという「ずるさ」が、問題の本質を炙（あぶ）り出すという効果を活かしながら。

ただ一点、他の少女が長所・短所とも活写されているのに対し、律子の長所・美点については筆に遠慮が見られ、記述が淡白なのが気になった。しかしこれも、作者の人間味の表れとみれば、十分に納得がいく。

本書が終始訴えようとしているのは、貧しさが育（はぐく）む孤高の精神の貴（たつと）さであり、富に対峙する際の心のあり様だ。これらは他者からは不可侵の領域。律子は最後まで、自らの中の本物を探し求め、自分の意志で、ひたすら世間を彷徨（さまよ）って行く。

これほど優れた小説が、「土砂降り」という同人誌を媒体にして発表されたという事実に、数多の同人誌は瞠目するに違いない。

文筆家が鼓舞される力を、この作品はもっている。